

れる斜面の微地形と土地利用（水田の分布・集落立地など）の結びつきが強く、地這りと土地利用は密接に関わっていると考えられる。しかし土地利用決定因子の中での「地這り」の位置は、それほど高くない。地元の人にとっては、地這りという現象が日常茶飯のことなので、生活に溶け込んでしまい、ふだんはほとんど意識していないということであろう。

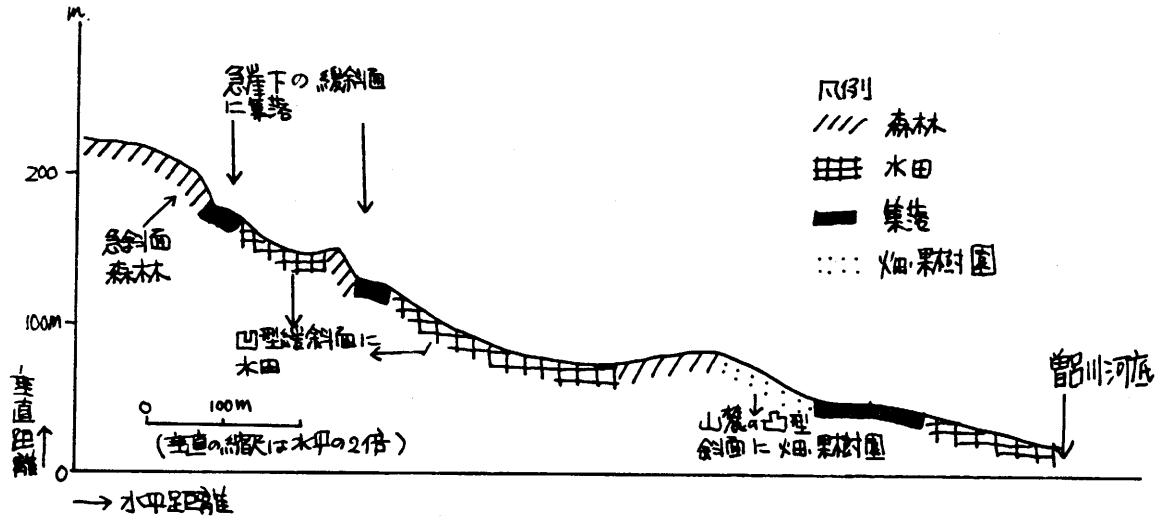


図1 地這り地の地形断面と土地利用（断面図 1:25000 鴨川の地形図より作成）

長野県鬼無里村の過疎現象に関する地理学的考察

久保田 美子

長野県上水内郡鬼無里村は、長野市から北西へ約20km、バスで1時間ほどの距離にある山村である。周囲を1,000 m級の高山に囲まれ、裾花川（犀川の支流）およびその支流に沿ってひらかれた緩傾斜地に、点々と集落が散在している。

鬼無里村の急激な人口減少は昭和30年ごろから始まるが、35年から40年にかけての減少は特に急激であった。45年から50年にかけて、一時かなり鈍化したが、最近また激化する気配も見えている。このように急激な人口減少のうち、最も深刻なのが若年層の流出である。それが出生率の低下を招き、ついには人口の自然減少が始まり、高齢化が深刻になるという結果をもたらしている。転出先は長野市が圧倒的に多い。人口減少の地域差では、おおむね、村の中心からはずれた地域、それも長野市から遠い地域の減少が著しいということが言える。

このような人口減少をもたらした要因はさまざまであり、複雑であるが、次のような事柄が考えられる。すなわち、第三紀層の代表的地すべり地帯のひとつであることをはじめ、積雪などのきびしい自然条件、戦前まで村の商品経済を支えた大麻生産とそれにとまう冬仕事としての畳糸製造が、輸入麻および化学繊維の発展に押されて衰退した後、それに代わる農業生産としてタバコ、野菜類、キノコ、山菜類の栽培、畜産などが行われているが停滞気味であること（それにとまなって農家の兼業

化が著しく進行、長野市への通勤兼業が増加している)、工業誘致はいくつか行われたがいずれも小規模で主婦の通勤が多く、村内に就職機会、特に男性の勤められる職場が少ないこと、生活の都市化・村内の施設整備の立ち遅れなどから村に戻りたくないという意識が若者の中に生まれること、などである。

人口の減少を食い止める手段として、現在道路条件の悪い長野市に通ずる県道を国道に昇格させて整備を促進し、村を完全に長野市への通勤圏内にしてしまおうという動きがあるが、その前途は多難であるように思われる。

人口減少の影響としては、学校教育、集落再編成事業を取り上げた。教育面では、今まで村内に三つあった小学校が昭和56年度より統合されてひとつになること、交通事情の悪さから高校への通学は長野市その他に下宿して行く者がほとんどであること、大学・短大への進学率の低さなどがある。また、高校進学を機会に村を出ることが、若者の村外流出の契機となっていることが注目される。集落再編成事業は、昭和50年と51年に12戸が拠点集落へ移転した。しかし、ほとんどの世帯が、夏は山の元の住宅に住んで通勤のかたわら農業を行い、冬になると里へ下りるといふ二重生活を強いられている。これは、農業を完全に捨て切れるだけの就職機会が山を下りてもなかったことが原因であると思われる。

近 郊 山 村 檜 原 村 の 変 貌

永 田 純 代

檜原村は、東京都の西北端に位置する山村である。総面積の92%は山林で、その地形は急峻であり、典型的な峡谷型の山村といわれている。東京の都心より直線距離で約60km、鉄道(国鉄の武蔵五日市まで)とバスを使って村の中心部まで約1時間半余りで到達できるところにある。その豊富な自然と都心から近距離にあるという条件が絡まって、近郊山村として新しい役割を演ずるようになった。

従来、檜原村では他地域の山村と同様、林業と自給を目的とした農業を生業として営んできた。交通路の改善される以前は、五日市と山梨県上野原町あたりとの接触が主であった村の人々も、モータリゼーションの発達後は、八王子、青梅、立川への通勤が可能となり、域外通勤者と化し、賃金労働者が増加した。また逆に、都市の人々が週末になると、自然に親しむためにやってくるようになり、ウィークエンドエリアとしての価値が高くなってきた。そのため、村内には、観光事業の開発が余儀なくされる状況が生み出された。これは同時に、村内の生業と結びつけることによって、村内産業の振興に大きく貢献している。

檜原村の林業の歴史は、薪炭に始まっている。中世に伊奈市や五日市の市との取引が起り、近世には盛んになったが、村人の生活は楽なものではなかった。村から搬出された薪炭は安くたたかれ、日常生活品や不足している食糧を逆に高く売りつけられるという不平等な取引であったからである。一方、用材の方は、青梅林業の中心である多摩川流域地域の余波を受けて、以後の盛衰を展開する。青梅林業自体は、四谷新宿の近郊林業の衰退により、その価値の高まりが本格化したわけであるが、